

日中韓の友人会話における依頼の談話展開

生天目 知美、劉 雅静、大和 啓子

キーワード：ポライトネス、依頼、友人会話、談話展開パターン、親密度

1. はじめに

言語や文化の異なる人々がコミュニケーションをする際、時に摩擦や誤解が生じる危険性がある。それは言語表現のレベルに起因する場合もあるが、会話の進め方に起因することも無視できない。日本語教育でも談話レベルでの会話指導を行う上で、日本語の談話展開の特徴や学習者の母語との違いが明らかにされることが求められている(柏崎 1993)。

本稿では依頼の会話を取り上げ、友人会話における談話展開パターンを明らかにする。依頼とは、相手へ負担をかけることを要求するため、依頼者は自分の欲求を一方向的に表明するのではなく、相手に対しての配慮が必要となる。その配慮は会話参加者の人間関係や相手にかかる負担度によって変化し、その変化が談話展開パターンに影響することが予想される。そこで本稿では特に上下関係のない女子大学生の友人会話に焦点を当て、相手への負担度と親密度の違いによる談話展開パターンの特徴を捉え、それらを日中韓で比較することを目的とする。

2. 依頼の談話展開に関する先行研究と本研究の目的

2.1 先行研究

日本語の依頼会話における談話展開についての先行研究では、日本語そのもの、あるいは他言語との比較から、会話の段階的な進め方(どのように始まり、どのように展開するか)と特定の構成要素の有無による依頼の明示性が注目されている。

段階的な進め方としては、日本語には話しかけから段階を追って依頼発話に向かうという特徴があることが多くの先行研究で指摘されている。柏崎(1993)において依頼用件を発話する前に「あの」「すみませんが」などの相手を会話の場に引き込む表現が約90%とかなりの割合で用いられることが報告された。謝(2001)ではノートを借りるという負担度の軽い依頼について、中国語では相手に対して「注意喚起」を行ったあと、「状況の説明」などの発話をせずに直接「依頼発話」を行う傾向がある一方、日本語は親しい関係の相手に対しても、「注意喚起」だけではなく「状況の説明」を経て「依頼発話」を行う傾向があることが指摘された。このような先行研究からは日本語の依頼会話が負担度や相手との関係によらず、段階を追って会話を進める展開パターンを持っていることが報告され、その方法が日本語と中国語とは異なっていることが分かる。

一方、猪崎(2000)によると、フランス語は日本語とは異なり「依頼の予告」や「依頼発話」が必ずしも使われず、依頼者の説明を受けて被依頼者が依頼を推測し、自ら承諾や申し出を行う暗示的な談話展開パターンの傾向があるという。この点から見ると、日本語は「お願いがありまして」などの「依頼の予告」によって予め依頼であることを明示的に示したり、「依頼発話」を発話したりすることで明示的・直接的な依頼を表していることになる。アクドーアン・大浜(2008)でもトルコ語と日本語との比較を通して同様の指摘をしている。フランス語やトルコ語、日本語との比較では、「依頼の予告」や「依頼発話」の出現が依頼会話の明示性を左右することがあり、言語によって傾向が異なることが分かる。

韓国語の談話展開パターンについては槌田(2003)、蔽(2004)などがある。槌田(2003)は「前置き」の使用条件が日本語と韓国語で異なっているという指摘をしているが、談話展開パターンの特徴を詳細に分析した研究は十分ではないようである。

2.2 本研究の目的

本研究では友人間の会話場面を取り上げ、本質的に相手に負担をかける依頼場面において依頼者がどのように依頼の意思を被依頼者に伝えるのかを、談話展開に注目して分析する。特に、依頼者が依頼の意思を伝える構成要素の展開パターンと、猪崎(2000)で指摘された「予告」や「依頼発話」の出現による依頼の明示性に注目する。相手との親密度や依頼内容の負担度が談話展開に与える影響、各場面で現れる談話展開についての日中韓の特徴を明らかにしたい。

談話展開に影響を与える要因として設定した負担度と親密度は、どちらも先行研究において十分に比較検討されているとは言えない。橋元他(1992)では、日本語は上下関係に、中国語は親疎関係に敏感に反応するということが述べられているが、談話展開に親疎関係の違いが影響するのか否か、調査する必要がある。

また、本研究では分析資料をできるだけ自然な状況で収集し、現実に行われているコミュニケーションを最大限に明らかにすることを重視した。従来の先行研究は談話完成テストやロールプレイによって収集された資料を用いているのがほとんどである。ロールプレイは談話完成テストに比べ、より現実を反映していると考えられるが(謝 2001)、依頼内容や会話相手などの設定によっては現実とかけ離れてしまう。一方、全くの自然会話では諸条件が統制されず、各言語の傾向を見るのが難しくなる。そこで本研究では自然会話により近い環境であり、且つ条件が統制された資料を収集する方法を採用することにした。

こうした目的・設定の基に収集された会話データを分析資料として、各場面・各言語における談話展開のパターンを明らかにしていく。以降では4節において依頼者側から依頼の意思を表すための構成要素がどのような展開パターンとして現れるかを概観し、どのような段階を追って依頼発話が現れるかに注目する。5節と6節では依頼者の意思の明示性について注目し、5節では特に依頼を切り出す「前置き」の有無、6節では「依頼発話」が無いケースを分析する。

3. 調査概要

本研究ではできるだけ自然談話に近い会話データを収集することを目的に、日本語・中国語・韓国語それぞれの母語話者同士による架空の依頼の電話会話を録音収集した。

まず、各言語に 40 名程度のベースの協力者を集めた。協力者は世代差や性差、地域差を考慮し、女子大学生(全員 20 代)、日本は関東地方出身者、中国は北京(含近郊)出身者、韓国はソウル(含近郊)出身者に限定した。

ベースの協力者はまず負担度によって、負担度の軽い依頼(EASY)と負担度の重い依頼(HARD)の 2 つのグループに分けられた。ベースの協力者はどちらか一方の依頼を担当したため、各依頼につきベースの協力者は 20 名程度である。依頼内容はどちらも大学の教授から頼まれたという設定で、負担度の違いは以下のように設けた。

【表 1】負担度の違い

負担度軽(EASY) 【アンケート調査】	敬語の使い方に関するアンケート調査。約 50 問の正誤問題に対して、○×で判断を書き込む。所要時間 5 分の見込み。終了後は郵送。
負担度重(HARD) 【初対面会話】	知らない人と会って 15 分間自由会話をを行い、会話録音する。1 週間おきに 4 回繰り返す。時間や場所は依頼された人が決められる。

表 1 で示した負担度によって分けられた協力者に、親しさの異なる 2 人(親友(Best Friend: BF)・友人(School Friend: SF))に対して電話をかけ、その内容を録音してもらった。BF は「親友と呼べるような親しい友達」、SF は「同じ団体(学科、ゼミ、サークル、アルバイト等)に属し、よく話すことはあるが、プライベートで遊びに行くほどではない友達」と設定し、協力者に説明した上で、協力者自身に該当する依頼相手を選ぶよう指示した。

協力者から電話を受けた相手は、その通話が調査のためであること、電話の目的・内容等については事前に知らされていない。電話の受け手へは電話後、協力者からの説明および書面にて説明、承諾を得た上で、承諾を得たデータのみを分析対象とした。録音終了後は、協力者と電話の受け手にフォローアップアンケートを行った。

以上のように収集された有効データにおけるベースの協力者は、日本語で 37 名(EASY20 名/HARD17 名)、中国語は 43 名(EASY23 名/HARD20 名)、韓国語 46 名(EASY23 名、HARD23 名)となった。ベースの協力者はそれぞれ 2 人(BF と SF)と会話をするため、日本語では 74 会話、中国語では 86 会話、韓国語では 92 会話が有効データである。

なお、本研究の調査において電話の相手は当該の電話が調査対象となることが事前に知らされていないため、依頼に対して受諾するかどうかは会話によって異なる。EASY 場面では全てのデータが受諾であったが、HARD 場面では受諾・保留・断りの全てが見られた。詳細は以下の表 2 を見られたい。

【表 2】日中韓における依頼への受諾・保留・断りの会話数(HARD 場面)

	日本語		中国語		韓国語	
	対 BF	対 SF	対 BF	対 SF	対 BF	対 SF
受諾	9(53%)	11(64.8%)	14(70%)	15(75%)	13(56.5%)	13(56.5%)
保留	4(23.5%)	3(17.6%)	4(20%)	4(20%)	3(13.1%)	5(21.7%)
断り	4(23.5%)	3(17.6%)	2(10%)	1(5%)	7(30.4%)	5(21.7%)
合計会話数	17	17	20	20	23	23

4. 談話展開パターン

4.1 本研究における談話展開に関わる構成要素および展開パターン

本稿の目的は、展開パターンの側面から依頼者がどのように依頼の意思を伝えるのかを明らかにすることである¹。談話展開に関わる構成要素として、猪崎(2000)、謝(2001)等の先行研究を参考に「前置き」「概要説明」「詳細説明」「依頼発話」の4つを設定し、各要素の出現順序の分析を行う。実際の会話データには4つの構成要素以外の内容や、被依頼者との交渉部分が現れることもあるが、本研究では依頼会話のより主要な構成要素のみに注目することで、談話展開パターンの特徴を把握することを目的とする。また、これらの要素はターン毎にコーディングするのではなく、各データでの要素の有無を問題とする。

【表 3】 談話展開に関わる構成要素

構成要素	発話例
前置き	依頼者側の依頼の意思を予告する 例)「ちょっとお願いがあつてね」「頼みたいことがあるんだけど」
概要説明	依頼内容(調査の存在のみ)の説明 例)「先生に頼まれて、アンケート調査に協力してくれる人を集めることになったの」
詳細説明	具体的な調査内容についての説明 例)アンケートの方式、所要時間、郵送方法 会話の頻度、相手の決め方、時間や場所の決め方など
依頼発話	被依頼者へ協力を求める発話 例)「お願いしてもいいかな」「協力してもらえますか」 「協力してもらえないかなと思って」 「頼みたいんだけど、いいかな」「どうかな?」

データ分析の結果、前置きを除く3つの構成要素による談話展開パターンを、①[依頼発話-概要説明-詳細説明]、②[概要説明-依頼発話-詳細説明]、③[概要説明-詳細説明-依頼発話]、④[依頼発話なし]の4つに分類した。④[依頼発話なし]とは、概要説明あるいは概要説明+詳細説明の発話の後、依頼者の依頼発話なしに被依頼者が受諾等の態度表明を行うなどで依頼発話が見れないパターンである。それぞれの例を以下に示す。

¹ 談話の展開は依頼者のみで作るのではなく、被依頼者の反応と共に展開されていくものである。その意味では被依頼者を含めた展開を分析することが理想的ではあるが、今後の課題としたい。

(1) 談話展開パターン①[依頼発話-概要説明-詳細説明]

中国語 HARD(対 SF) C:依頼者 R:被依頼者 (C_05_SF_E)

	中国語	日本語(翻訳)
依頼	3C 那个我现在要做一个调查、 请你帮一下忙可以吗？ (4R 啊、好)	3C あの、私はいまある調査をしている ところなんだけど、手伝ってもらえる？ (4R うん、いいよ)
概要	5C 就是他说是个老师做的 关于使用礼貌用语的调查 (6R 嗯)	5C ある先生が行っている敬語の使用に ついての調査なんだって (6R うん)
詳細	7C 然后他就是需要你和老师 安排好的人见面 9C 然后就是自由会话 15 分钟、 然后会话的内容做成录音	7C あなたには先生が手配した人と会っ てほしいんだけど 9C 15 分間自由に会話をして、会話内容は 録音されるの

(2) 談話展開パターン②[概要説明-依頼発話-詳細説明]

日本語 EASY(対 SF) C:依頼者 R:被依頼者 (J_26_SF_E)

概要	15・17C 学類の先生が敬語の使い方に関する意識調査でアンケート調査に 協力してくれる人を集めてるんだって (18R おう、うん)
依頼	22C おちゃんに、やってもらえないかなー的な (23R お、うん)
詳細	25・28C 内容は全部で 50 問で○×で回答する形式で 5 分ぐらいでできるやつで (29R うん、ほうほう)

(3) 談話展開パターン③[概要説明-詳細説明-依頼発話]

日本語 EASY(対 SF) C:依頼者 R:被依頼者 (J_20_SF_E)

概要	10C 今先生に頼まれてさあ、敬語の使い方に関する調査のアンケートに 協力してくれる人をちょっと集めてんだけど (11R うんうん)
詳細	12C・14C 全部で 50 問くらいで、○×形式で、アンケート用紙を郵送で送って、 返信してもらいたいな感じなんだけど、謝礼もあるみたいない感じ なんだけど (15R うんうん)
依頼	16C もしよかったですら協力してもらえたらなとか思ったんだけど (17R アンケートみたいなのやつでしょ？大丈夫)

(4) 談話展開パターン④[依頼発話なし]

日本語 HARD(対 BF) C:依頼者 R:被依頼者 (J_07_BF_H)

概要	9C 学類の先生に頼まれて 11C なんか敬語の使い方に関する研究があるんだけど、 13C その調査に協力してくれる人探してんのね
----	---

15R ああ、いいよ。うん、全然いいよ	←被依頼者による態度表明
---------------------	--------------

4.2 日中韓の談話展開パターン

前述した分類方法によって談話展開パターンを分析した結果、以下の表 4 に示す結果を得た。表 4 では各場面で最も多かった談話展開パターンに網掛けをしてある。表 4 から明らかかなように、EASY 場面では最多のパターンが各国語で異なるが、全体の傾向からは共通して③[概要説明・詳細説明・依頼発話]のパターンが最も多く、日本語では 47.3%、中国語で 44.2%、韓国語で 40.2%を占めた。特に HARD 場面では 3 言語ともに 50%以上の割合を占めており、負担度が高い場面では段階を追って依頼発話に至るケースが多い²。

【表 4】各場面で 4 つの談話展開パターンが占める割合(データ数/合計)

展開		①[依-概-詳]	②[概-依-詳]	③[概-詳-依]	④[依頼なし]
日本語	EASY/BF	0/20(0%)	9/20(45%)	8/20(40%)	3/20(15%)
	EASY/SF	2/20(10%)	7/20(35%)	10/20(50%)	1/20(5%)
	HARD/BF	0/17(0%)	3/17(17.7%)	9/17(52.9%)	5/17(29.4%)
	HARD/SF	0/17(0%)	6/17(35.3%)	9/17(52.9%)	2/17(11.8%)
	合計	2/74(2.7%)	25/74(33.8%)	35/74(47.3%)	12/74(16.2%)
中国語	EASY/BF	8/23(34.8%)	6/23(26.1%)	6/23(26.1%)	3/23(13%)
	EASY/SF	5/23(21.7%)	6/23(26.1%)	9/23(39.1%)	3/23(13%)
	HARD/BF	2/20(10%)	2/20(10%)	10/20(50%)	6/20(30%)
	HARD/SF	4/20(20%)	2/20(10%)	11/20(55%)	3/20(15%)
	合計	19/86(22.1%)	15/86(17.4%)	38/86(44.2%)	14/86(16.3%)
韓国語	EASY/BF	1/23(4.4%)	9/23(39.1%)	6/23(26.1%)	7/23(30.4%)
	EASY/SF	1/23(4.4%)	8/23(34.8%)	8/23(34.8%)	6/23(26.1%)
	HARD/BF	1/23(4.4%)	7/23(30.4%)	12/23(52.2%)	3/23(13%)
	HARD/SF	0/23(0%)	6/23(26.1%)	12/23(52.2%)	5/23(21.7%)
	合計	3/92(3.3%)	28/92(30.4%)	37/92(40.2%)	24/92(26.1%)

日本語は韓国語・中国語に比べ、EASY 場面における③[概-詳-依]が占める割合が高い。EASY/BF 場面でも 40%を占めている。この点は謝(2001)の指摘と同様、負担度や親疎に関わらず段階を追って談話を展開するパターンとなる傾向が強いことを示している。しかし一方で、EASY/BF 場面で最多の展開パターンは②[概-依-詳]であり、負担度が低く親しい関係であれば依頼発話のタイミングが他の場面よりも早くなる傾向が見られることも分かった。さらに興味深いのは④[依頼発話なし]である。猪崎(2000)の指摘とは異なり、中韓よりは少ないものの、特に HARD/BF 場面で 30%近く見られた。

中国語の特徴として挙げられるのは、日韓に比べ依頼が冒頭に来る①[依頼-概要-詳細]が

² HARD 場面は詳細な説明を要する依頼内容であったことが談話パターンに影響している可能性もあるが、②[概-依-詳]も一定数見られることから、負担度の高さが影響していると考えられる。

多い³(全体で中国語 22.1%、日本語 2.7%、韓国語 3.3%)ことであり、謝(2001)の指摘と同様の結果となっている。特に EASY/BF 場面では 34.8%を占めており、最も多い。しかし常に多いわけではなく、HARD 場面では③[概要・詳細・依頼]が増え、特に BF に対して①のパターンが減っている。これらの結果から、説明なしに依頼発話から会話を始める展開は、負担度・親疎関係の両方から影響があると考えられる⁴。

韓国語は全体として日本語の傾向と類似しているが、日中と比較して④[依頼発話なし]が多いことが特徴である(全体で韓 26.1%、日 16.2%、中 16.3%)。EASY 場面に多く、特に EASY/BF 場面では 2 番目に多いパターンとなっている。興味深いのは HARD/BF 場面において、日中では④のパターンが最も高い割合であるのに対し、韓国語は最も低い割合で、逆になっていることである。④[依頼発話なし]の分析については 6 節にて詳述する。

5. 前置きの有無

前置きは依頼談話の冒頭付近で依頼の意思を予め示し、以降の会話が会話相手に向けて依頼を行うためのものであることを明示する機能がある。本節では、依頼の意思を予め明示的に示す前置きの有無に注目し、使用率と負担度や親密度、展開パターンとの関連を分析する⁵。

まず、以下の表 5 に日中韓の依頼会話における負担度(EASY/HARD)と親密度(BF/SF)の場面別による前置きの使用状況を示す。

【表 5】 各場面による前置きの使用

	EASY		HARD		合計
	BF	SF	BF	SF	
日本語	6/20(30%)	4/20(20%)	6/17(35.3%)	6/17(35.3%)	22/74(29.7%)
中国語	11/23(47.8%)	9/23(39.1%)	15/20(75%)	11/20(55%)	46/86(53.5%)
韓国語	9/23(39.1%)	9/23(39.1%)	14/23(60.9%)	14/23(60.9%)	46/92(50%)

表 5 から分かるように、日中韓で日本語が最も前置きの使用率が低く(平均 29.7%)、次いで韓国語(平均 50%)、最も高かったのは中国語(平均 53.5%)であった。3 言語とも負担度が重い方が使用率が高かった。親密度による差は日本・韓国ではほとんど差がないが、中国語では特に HARD 場面で対 BF が対 SF より 20%ほど使用された割合が高い。

一方で負担度との関連は強く、特に中国語と韓国語では HARD 場面で使用率が高い。中

³ ただし、冒頭で依頼があっても再度依頼発話が繰り返されるケースも観察されたことから、今後さらに分析を進める必要がある。

⁴ BF に対して EASY 場面と HARD 場面では談話展開の傾向が異なっていることが非常に興味深い。EASY 場面では BF より SF に配慮するのに対し、HARD 場面では逆転して SF より BF に配慮をしていることになる。P(上下関係)と D(距離)、R(負担度)の合計を当該の会話で必要とされる適切な丁寧度と考える Brown&Levinson(1984)とは矛盾が生じる可能性がある。

⁵ 前置きが表す依頼の意思の明示性が相手への配慮とどのように関連するかは、各言語によって異なる可能性があり、さらに分析が必要である。今後の課題としたい。

国語では HARD/BF 場面で最も高い使用率(75%)となっていることが目立つ。

次に、前置きの使用と依頼の展開パターンとの関連は以下の表 6 ようになった。

【表 6】 各展開パターンにおける前置きの使用数

	日本語		中国語		韓国語	
	E	H	E	H	E	H
①[依-概-詳]	0/2	0/0	2/13	2/6	0/2	0/1
②[概-依-詳]	6/16	4/9	3/12	2/4	5/17	7/13
③[概-詳-依]	3/18	6/18	12/15	15/21	7/14	14/24
④[依頼なし]	1/4	2/7	3/6	7/9	6/13	7/8
計	10/40	12/34	20/46	26/40	18/46	28/46

(注：E:EASY、H:HARD、前置き用例数 / 各展開パターンの総数)

日本語は EASY 場面では②[概-依-詳]で、HARD 場面では③[概-詳-依]での使用数が多かったが、特定のパターンが見いだせない。中国語では負担度によらず③[概-詳-依]で多く使用され、このパターンはそれぞれの場面の半数以上を占めている。HARD 場面では④[依頼発話なし]での使用数も目立つ。韓国語では EASY 場面では特定のパターンでの使用が見られないが、HARD 場面では③[概-詳-依]での使用率が高かった。

3 言語では前置きと②や③の組み合わせが多いことが共通している。このパターンは前置きと依頼発話によって依頼者の依頼の意思が明示されており、猪崎(2000)が日本語の特徴として指摘した直接的・明示的な依頼の談話展開である。しかし、本研究では日本語より韓国語・中国語により多くこの明示的な展開パターンが見られた。日本語では依頼発話そのものは多いものの(全体の約 84%、表 4 参照)、前置きによる依頼の意思の明示があるとは言えない結果となった。日本語は中国語・韓国語と比べ負担度や親疎とも関連が見られず、随意に使用されていると考えられる。

6. 依頼発話が現れないパターン

6.1 依頼発話の下位分類

フランス語やトルコ語の依頼会話では依頼発話が現れない傾向を持つことが先行研究で指摘された(猪崎 2000、アクドーン・大浜 2008)。フランス語では依頼者は依頼発話をする前に被依頼者からの申し出があることを期待していることが、依頼発話が現れない要因として述べられている(猪崎 2000)。本研究のデータにも日中韓それぞれに依頼発話が見れない会話が観察されたが、日中韓ではどのような環境で依頼発話の不出現に至っているのか、以下で分析を行う。

データ観察の結果、依頼発話が見れない会話は、依頼発話が見れない理由から、①被依頼者の先行態度表明だけではなく、②依頼者の依頼発話回避、③受諾前提の依頼者・被依頼者による態度不明示の 3 つのタイプに分類することができた。以下、それぞれのタイプ

について、会話例を示しながらその特徴について述べる。

6.1.1 被依頼者の先行態度表明

まず、依頼者から態度表明を促される前に、被依頼者自ら受諾拒否の態度を表明する(①被依頼者の先行態度表明)タイプについて述べる。被依頼者は、依頼者が概要説明や詳細説明をしている過程で、その一連の発話が自己に対する依頼であると解釈し、それに対する反応を返している。

(5) 日本語 HARD(対 BF)⁶ C:依頼者 R:被依頼者

- 9C が、学類の先生に頼まれて
10R うん
11C なんか敬語の使い方に関する研究
12R うん
13C があるんだけど、その//調査に//協力してくれる人探してんのね
14R /うん/あ
15R ああ、いいよ。うん、全然いいよ ← 被依頼者の態度表明
16C いい？
17R うん (J_07_BF_H)

13C までで依頼者は、「調査に協力してくれる人を探している」という概要説明だけで、詳細の説明も待たず、かつ明示的な依頼も行なわれていない時点で、15R は、「いいよ」と、受諾の返答を返している。

一方で、同じ被依頼者の先行態度表明のタイプに分類したものであっても、「お願いがあるんだけど」のような依頼談話の前置きがある場合には、(5)のような概要説明だけを聞いて受諾するような、早いタイミングでの態度表明は見られず、次の(6)のように詳細情報までを確認した後に受諾または拒否が示されていることが確認された。

(6) 日本語 EASY(対 BF) C:依頼者 R:被依頼者

- 4C え、あのさあ、今ちよっと、外にいてさあ、/(ウィルコム)がないからさ、ちよっとお願いがあって
5R /うん
5R うん
6C あのね、私今//なんか大学の先生に//頼まれ//て、//敬語に関する意識調査のアン

⁶ 会話例で使用される記号は以下の通り。

// : 他の発話者との発話の重なるの始まり

/ : 重なっている発話の内容を表す。

() : 聞き取りにくい部分。聞き取ったが不明確な内容。

- ケート調査//があって、協力して//くれる人を//集めなきゃいけないくて
- 7R /うん/うん/うん/うん/うん/うん
- 8R うん
- 9C で、アンケートが
- 10R うん
- 11C なんか全部で 50 問くらいで
- 12R うん
- 13C ○×で回答する形式?//らしくて
- 14R /うん、うん
- 15C 所要時間は 5 分くらい
- 16R うん
- 17C で、なんかアンケートは、//あの一、郵送で先生から//送られてくるんだけど、それに//書いて、返信用封筒に入れて、投函してもらおうっていうやつでなんか、//仲いい人に声かけてみたいな//感じで
- 18R /うん/うん/うん/うん/うん
- 19R うん、いいよ ←被依頼者の態度表明 (J_21_BF_E)

このように、被依頼者の態度表明のタイプには、詳しい説明をしないうちから被依頼者が早いタイミングで快諾する場合と、また、前置きによって依頼の談話であることが明確にされた上で必要な説明を全て聞いたことにより、依頼発話はなくとも態度を表明する場があることがわかった。

6.1.2 依頼者の発話回避

次に、依頼者が依頼発話をする機会(ターン)があるにもかかわらず、依頼発話をしない(② 依頼者の依頼発話回避)タイプについて見る。

(7)日本語 HARD(対 BF) C:依頼者 R:被依頼者

- 11C 先輩に、ちょっとなんか//人を探してほしいって、調査の何か協力してくれる人捜してほしいって言われて
- 12R /うん
- 13R うん、うん
- 14C うん、なんか、敬語の使い方に関する研究してる人で
- 15R ふーん
- (中略：調査の内容の詳細説明)
- 20C うん。なんか空いてる時間でいいらしいの。というか、//あの、場所はなんかどこでもよくて

- 21R うん、うん
 22R うん、うん、うん
 23C (みたいな)っていう
 24R っていう
 25C っていうね
 26R いいよー ←被依頼者の態度表明 (J_37_BF_H)

依頼者 C は 20C まで、概要説明、詳細説明を行っている。それを受けて、22R は被依頼者が「うん」と相づちを打つが、C はそれ以上新たな情報を付け加えることもなく、依頼に対する協力を求めることもなく、ただ 23C 「みたいなっていう」 25C 「っていうね」などと会話を展開させない発話を重ねる。そして、最終的に被依頼者が自ら 26R 「いいよー」と受諾の態度表明を行っている。すなわち、これは、依頼者が、会話を展開させずに依頼発話を回避した例と見ることができる。

6.1.3 受諾前提の依頼者・被依頼者による態度不明示

最後に、依頼者が依頼発話をしないだけでなく、被依頼者も態度を表明しないタイプが観察された。さらに両者ともに、依頼の遂行成立を前提にして会話が進められるという特徴もあった。これを③受諾前提の依頼者・被依頼者による態度不明示タイプとする。

(8)韓国語 EASY(対 BF) C:依頼者 R:被依頼者

- 5C 私たちの何だっけ、アンケート調査をするんだけど//教授から頼まれたんだ
 6R うん
 7R なに?
 8C それで、敬語の使用に関するアンケートをするんだけど//あなたの家に
 9R /(*)が?
 10C うん?
 11R うん、//うん
 12C /あなたの家に郵便が送られたら、そこにアンケート用紙の内容があるの
 (中略: アンケートの内容について説明)
 17C そしたら、あんたが、それが終わってからもう 1 回その封筒に入れて返送すればいいんだ
 18R 返送はどこに?ただ郵便局に出せばいいの?
 19C うん、そうだよ。ところで、謝礼、謝礼はあるみたいなんだけど、金額はよくわかんない。あることはあるみたい
 20R うん、やった (K_05_BF_E 翻訳)

(8)の例では、依頼者 C が調査の概要説明と詳細の説明を進めている。これに対し被依頼者は 18R において自らが依頼に協力する場合の具体的な方法について情報を求めている。依頼者は 19C でこれに対する返答と、謝礼について情報を提供すると、20R は「やった」といって、謝礼を受ける立場、すなわち依頼内容を遂行する立場に立って返答をしている。この会話は、依頼の話題は 20R で終わり、以降はこの依頼と関係の無い話題が続いていく。この会話において、依頼者は前置きを含め、直接的な依頼発話行っておらず、また、被依頼者も「いいよ」「大丈夫だよ」などの明示的な受諾を示さない。つまり、このタイプは、両者がお互いの会話意図を明示的に示していないものの、お互いが依頼—受諾の会話であることを前提として、会話を進めているといえる。

6.2 各言語における依頼発話なしのタイプ

ここでは、前節で述べた依頼発話なしパターンの下位 3 タイプが各言語によってどのように表れているかを示す(表 7)。

【表 7】 各言語における依頼発話なしのタイプ分類(用例数)

	日本語		中国語		韓国語	
	EASY	HARD	EASY	HARD	EASY	HARD
①被依頼者の先行態度表明	4	5	6	9	9	8
②依頼者の依頼発話回避	0	2	0	0	0	0
③依頼者・被依頼者態度不明示	0	0	0	0	4	0
計	4	7	6	9	13	8

3 言語とも被依頼者が依頼発話を待たずに先行態度表明する①のタイプが多く、被依頼者の積極的な関与によって依頼発話なしパターンとなっていることがわかる。特に、韓国語で、この依頼発話なしパターンが多く観察された。また、依頼者側が依頼発話を回避する②のタイプは日本語の HARD 場面のみ、依頼者・被依頼者ともに依頼遂行の成立を前提にする③のタイプは韓国語の EASY 場面のみそれぞれ観察された。

次に、依頼の負担と依頼相手の親密さとの組み合わせから依頼発話なしパターンが現れる割合を検討する。

【表 8】 「依頼発話なし」が各場面で占める割合

	EASY		HARD	
	BF	SF	BF	SF
日本語	3/20(15%)	1/20(10%)	5/17(29.4%)	2/17(11.8%)
中国語	3/23(13%)	3/23(13%)	6/20(30%)	3/20(15%)
韓国語	7/23(30.4%)	6/23(26.1%)	3/23(13%)	5/23(21.7%)

日本語では負担度によらずどちらも BF で依頼なしパターンが見られる。特に HARD/BF、

すなわち、依頼の負担が重くより親しい関係の時に依頼発話なしが多い(5例)。用例のほとんどが①先行態度表明であるが、2例ある②依頼発話回避は HARD の SF/BF どちらにも1例ずつ見られた。

また、HARD/BF で、依頼発話なしパターンが最も多くみられるのは中国語も同じであった(6例)。しかし、中国語の場合には①先行態度表明のみで、日本語のような②依頼回避のパターンはなかった。

日本語と中国語はどちらも「依頼発話なし」の展開パターンが用例全体の 16%ほどしかなく、もともと少ないパターンである。このことから基本的には依頼者が自ら依頼発話を発話するのが基本的であり、フランス語やトルコ語のように「相手からの応答を待つ」ことが期待されているとは言えないであろう。しかし今回の分析から、特に BF が HARD 場面で自ら積極的に応答発話を差し挟むケースがあることが分かった。その際の応答のほとんどは受諾であることから⁷、被依頼者である BF の方から比較的頼みにくい依頼をしている依頼者の心理的負担に配慮し、積極的に貢献しようとしている可能性がある。

一方韓国語は、日本語や中国語と異なり、HARD/BF の依頼なしパターンは最も少なく(3例)、負担が軽い依頼を親しい関係にする EASY/BF の場合に最も多く依頼なしパターンが現れている(7例)。また用例数は、BF/SF の差というよりは EASY/HARD の差が大きく、EASY 場面で多く現れた(EASY13例/HARD8例)。韓国語は日中に比べて[依頼発話なし]の展開パターンが用例全体の約4分の1である26%を占める。最も多いのは依頼発話が見れる展開パターンではあるが、ある一定程度、繰り返し出現するパターンと考えられ、その点で依頼者が被依頼者にこのパターンを期待する可能性がある。特に、BF/EASY 場面では頼みやすい相手・内容であるため、被依頼者は受諾するなら早く伝えようという傾向があるのかもしれない。依頼者も③態度不明示が EASY 場面で現れていることから、被依頼者が受諾することへの期待を持ち、依頼者・被依頼者双方が依頼の成立に期待を持って会話をしていることがうかがえる。

7. まとめと今後の課題

本稿では日中韓の友人同士の依頼会話について、依頼者が依頼の意思を伝える談話展開パターンに負担度と親密度の違いが与える影響を、段階的な会話の進め方と「前置き」「依頼発話」による依頼の明示性という点から検討した。

会話の進め方についての日中韓の共通点として、負担度が高くなると依頼発話のタイミングが遅い[概・詳・依]パターンが半数近くになったことが挙げられる。一方で、親密度の違いは負担度が異なる時に異なる振る舞いをもたらし、それは日中韓で異なった。日本語は負担度が軽い場面では、特に BF に対して依頼発話のタイミングが早くなり、より率直に依頼を行っていた。一方負担度が重い場面では、BF との会話では依頼者の依頼発話なしに被

⁷ 拒否の応答であったのは、日本語では BF/HARD で1例、中国語で BF/HARD、SF/HARD それぞれ1例ずつの合計3例であった。

依頼者の積極的な態度表明もあることが分かった。中国語は負担度が軽い時は中国語の特徴である冒頭からの依頼発話が見られるパターンが多く、BFにはより顕著にその傾向が見られる。しかし負担度が重い場面では、BFに対し依頼者は依頼発話のタイミングを遅らせていた。韓国語は全体として日本語と傾向が似ているが、EASY 場面では依頼発話そのものが出現しないパターンが多く、特にBF/EASYでは2番目に多いパターンとなった。

また、依頼の明示性という点については、「前置き」と「依頼発話」の両方が現れる明示的な談話展開は日本語よりも中国語・韓国語の方が多く、日本語は「前置き」はそれほど使用されないことが分かった。また、依頼発話が見れない談話展開の検討から、日中は非明示的な展開というよりは頼みにくいHARD 場面で被依頼者側からの助け船のような性格であるのに対し、韓国語は頼みやすいEASY 場面で被依頼者側の受諾を期待している可能性があることを示した。

本研究では負担度だけではなく親密度も日中韓の依頼会話の談話展開に影響を与えていることが明らかになった。しかし大まかな談話展開パターンを記述した段階である。今後は各言語の特徴をより明らかにするため、被依頼者との相互作用を含めた詳細な分析を行い、日本語教育の現場に還元していきたい。

謝辞 本研究は(財)博報児童教育振興会「第4回博報『ことばと教育』研究助成」の成果の一部である。全ての調査協力者に心より御礼申し上げます。また査読の先生方に有益なコメントをいただいたことにも感謝申し上げます。

【主要参考文献】

- アクドーアン・プナル・大浜るい子(2008)「日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析-相手配慮の視点から-」『世界の日本語教育』,18,57-72.
- 嚴廷美(2004)「日本語と朝鮮語における依頼の仕方の対照研究-発話機能の観点から-」『言語と文化 関西学院大学』,7,1-12.
- 猪崎保子(2000)「『依頼』会話にみられる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ」『日本語教育』104,79-88.
- 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析-依頼・要求表現の実際を中心に-」『日本語教育』,79,53-63.
- 謝オン(2001)「談話レベルからみた『依頼発話』の切り出し方-日本人学生同士と中国人学生同士の依頼談話から-」『日本研究教育年報』,5,77-101.
- 槌田和美(2003)「日本人学生と韓国人留学生における依頼の談話ストラテジー使い分けの分析-語用論的ポライトネスの側面から」『小出記念日本語教育研究会論文集』,11,41-54.
- 橋元良明他(1992)「婉曲的コミュニケーション方略の異文化間比較:9 言語比較」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』1,pp.107-159.
- Beebe,L.,T.Takahashi and R.Uliss-Weltz(1990)Pragmatic transfer in ESL refusals ,in

Scarcella, R., E. Andersen and S. Krashen (eds), *Developing communicative competence in a second language*, Newbury House, 55-73.

Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness : Some universals in language usage*. Cambridge University Press. .